２－２　国語学

研究・教育活動の概要と特色

国語学専攻分野は、文学部発足当初からの長い伝統を有し、国語学の領域全般に亘って研究と教育を続けてきました。特に、国語史学と方言学については、歴代の主任教授の方針を受け継ぎ、堅実な資料収集と分析に基づいた着実な研究成果を積み重ねるとともに、学生の指導と後継者の養成に精進してきました。それに加え、最近は、現代語研究の分野においても、研究・教育に一定の成果を上げるようになってきました。

国語史学については、特に語彙の研究に特色が見られ、研究対象・目的を、従来の語史の記述から語彙史の記述へとレベルアップさせるとともに、それに見合った方法論の開発に努めています。方言学については、地の利を活かし、東北方言を中心に分析と記述を長年行なってきましたが、最近は、「東北方言研究センター」を立ち上げ、社会と連係した研究を展開しています。なお、毎年、授業の一環として方言調査を行なっており、フィールドワークの技術開発や指導にも力を注いでいます。現代語研究は、留学生の増加を背景とし、現代語文法を中心に、対照研究をも視野に入れつつ研究・指導を行なっています。

本専攻分野では、各教員が自らの研究の進展を踏まえつつ責任を持って個別に学生を指導するとともに、大学院演習や研究会など、教員・学生が専門の枠を越えて互いに啓発し合う場を確保することを通して研究・指導を行なうことをモットーとしています。

Ⅰ　組織

１　教員数（2008 年 4 月現在）

教授：2

准教授：2

講師：0

助教：1

教授：斎藤倫明　小林隆

准教授：大木一夫　甲田直美

助教：飯田寿子

２　在学生数（2008 年 4 月現在）

学部 (2 年次以上)	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生	科目等履修生
37	4	12	23	0	0

３　修了生・卒業生数（2004～2008 年度）

年度	学部卒業者	大学院博士課程前期修了者	大学院博士課程後期修了者 （満期退学者）	博士学位授与者
04	5	9	5	3
05	13	3	3	1
06	14	4	3	2
07	8	6	6	4
08	13	7	3	1
計	53	29	20	11

Ⅱ　過去 5 年間の組織としての研究・教育活動（2004～2008 年度）

１　博士学位授与

１－１　課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
04	3	1	4
05	1	1	2
06	2	2	4
07	4	1	5
08	1		1
計	11	5	16

１－２　博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

百留恵美子、2004 年度、『和歌表現史の研究』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・小林隆、教授・仁平道明、助教授・大木一夫

琴鍾愛、2004 年度、『日本語方言における談話展開の方法』

審査委員：教授・小林隆（主査）、教授・斎藤倫明、教授・千種眞一、助教授・大木一夫

陳志文、2004 年度、『現代日本語の計量文体論的研究』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・才田いずみ、教授・小林隆、助教授・大木一夫

全成燁、2004 年度、『現代日本語における文の構造と話し手の認識的判断の体系—文における「事態」と「話し手」、そして「形式」－」

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・才田いずみ、教授・小林隆

林青樺、2005 年度、『現代日本語におけるヴォイスの研究—事象達成の観点から—』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・千種眞一、教授・小林隆、助教授・大木一夫

小林隆、2005 年度、『方言学的日本語史の方法』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・千種眞一、教授・才田いずみ、助教授・大木一夫

玉懸元、2006 年度、『日本語方言終助詞の研究』

審査委員：教授・小林隆（主査）、教授・才田いずみ、教授・斎藤倫明、助教授・大木一夫、助教授・甲田直美

李光赫、2006 年度、『条件表現における日中対照研究』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・千種眞一、教授・小林隆、助教授・大木一夫、助教授・甲田直美

小針浩樹、2006 年度、『現代日本語の分の意味と機能－文の意味の形－』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・才田いずみ、教授・小林隆

上野智子、2006 年度、『日本列島における海岸部地名語彙の研究』

審査委員：教授・小林隆（主査）、教授・仁平道明、教授・斎藤倫明

李仙花、2007 年度、『意味的観点からみた構文の研究－関連する構文との対照を中心に－』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・千種眞一、教授・小林隆、准教授・大木一夫、准教授・名嶋義直

櫛引祐希子、2007 年度、『日本語方言語彙の意味変化に関する研究』

審査委員：教授・小林隆（主査）、教授・斎藤倫明、教授・後藤斉、准教授・大木一夫

新井小枝子、2007 年度、『養蚕語彙の文化言語学的研究』

審査委員：教授・小林隆（主査）、教授・斎藤倫明、教授・千種眞一、准教授・大木一夫

小西いずみ、2007 年度、『富山県方言の文法に関する研究』

審査委員：教授・小林隆（主査）、教授・斎藤倫明、教授・才田いずみ、准教授・大木一夫

石井正彦、2007 年度、『現代日本語の複合語形成論』

審査委員：教授・斎藤倫明（主査）、教授・千種眞一、教授・小林隆、准教授・大木一夫

梁敏鎬、2008 年度、『外来語の受容に関する日韓対照研究』

審査委員：教授・小林隆（主査）、教授・斎藤倫明、教授・才田いずみ、准教授・大木一夫、准教授・甲田直美

２　大学院生等による論文発表

２－１　論文数

年度	審査制学術誌（学会誌等）	非審査制誌（紀要等）	論文集（単行本）	その他	計
04	15	4	0	0	19
05	13	7	0	0	20
06	4	8	1	1	14
07	4	4	0	1	9
08	11	2	1	1	15
計	47	25	2	3	77

２－２　口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
04	0	4	12	0	16
05	1	11	10	0	22
06	1	6	7	0	14
07	1	8	4	0	13
08	1	8	8	0	17
計	4	37	41	0	82

２－３　上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

（１）論文

飯田寿子　「個数合成語における列挙性と並立性－＜２＞をあらわす構成要素からなる合成語を中心に－」『文化』67-3・4、2004

陳志文　「週刊誌に見られる文体の類型－主成分分析を通して－」『計量国語学』24-6、2004
林青樺　「動詞の意味から見た受身文の多様性と連続性－『打たれる』を対象として－」『国語学』219、2004
倉田静佳　「馬琴のふりがな－文体・位相との関わり－」『表現研究』80、2004
琴鍾愛　「日本語方言における談話標識の出現傾向」『日本語の研究』221、2005
林青樺　「事象達成の観点から見たヴォイスの対立をめぐって」『日本語文法』5-1、2005
陳志文　「新聞と週刊誌と高校教科書に見られる文体の類型と特性」『日本語文法』5-1、2005
佐藤祐希子　「東北方言の『ナゲル』の形成に関する一考察－宮城県石巻市方言の分析を通して－」『文芸研究』158、2005
琴鍾愛　「大阪方言における談話標識の出現傾向」『文化』68-3・4、2005
林青樺　「事象達成の観点から見た自動性と他動性のあり方」『文化』69-1・2、2005
作田将三郎　「東北方言における＜雷＞の地方語史」『文化』69-3・4、2005
李仙花　「働きかけ性が関わる『てもらう』文の意味について－使役文との関係から－」『文芸研究』161、2006
松崎安子　「明治期の新聞における文語文記事の文体類型－小学校理科教科書の文体との比較から－」『文芸研究』162、2006
松崎安子　「明治期の文語文の類型－小学校理科教科書を対象として－」『文化』70-1・2、2006
澤村美幸　「方言伝播における社会的背景－『シャテー（舎弟）』を例として－」『日本語の研究』3-1、2007
作田将三郎　「地方語文献資料としての庶民記録－飢餓資料・農事日記・年代記について－」『日本語の研究』3-2、2007
鳴海伸一　「「次第」の国語化と時間副詞化」『訓点語と訓点資料』119、2007
川越めぐみ　「東北方言から見た宮沢賢治の童話のオノマトペ」『文芸研究』163、2007
吉田雅昭　「東北方言における基本的時間表現形式について－形式の変化と文法体系との相関－」『日本語の研究』 4-2、2008
佐藤志帆子　「『桑名日記』にみる近世末期下級武士の待遇表現」『日本語の研究』4-2、2008

澤村 美幸　「〈葬式〉を表す語方言分布の形成と社会的要因」『日本語の研究』4-4、2008

中西太郎　「「あいさつ」における言語運用上の待遇関係把握」『社会言語科学』11-1、2008

張雅智　「「ではないか」の断定用法」『国語学研究』47、2008

鳴海伸一　「「一所」から「一緒」へ」『文芸研究』165、2008

三浦佑子　「原因・理由を表す複合接続助詞と時制との関わり」『文芸研究』165、2008

津田智史　「談話からみる徳島県のアスペクト表現の今昔」『山口幸洋博士記念論集』桂書房、2008

（２）口頭発表

琴鍾愛　「日本語方言における談話標識の出現傾向 ―東京方言，大阪方言と仙台方言との比較―」　日本語学会　2004 年 6 月

櫻井真美　「山形市方言の順接仮定条件表現形式『ダラ』」　日本文芸研究会　2004 年 6 月

椎名渉子　「子守歌詞章の地域差―おどし表現・甘やかし表現を中心に―」日本方言研究会　2004 年 11 月

梁敏鎬　「日本語観国際コンセンサスから観た外行語の認知度」　韓国日本語学会 2005 年 3 月

作田将三郎　「近世後期の地方語文献資料について―宮城県を例に―」　日本語学会　2005 年 5 月

松崎安子　「明治期の文語文の類型―小学校教科書と新聞を対象として―」近代語研究会　2005 年 5 月

新井小枝子　「群馬県藤岡市方言における『養蚕語彙』の比喩表現」　日本方言研究会　2005 年 5 月

鳴海伸一　「『次第』の接尾語用法の成立と展開」　日本文芸研究会　2005 年 6 月

吉田雅昭　「現代日本語の終助詞『っけ』の用法」　日本文芸研究会　2005 年 6 月

梁敏鎬　「日韓大学生のアンケートから見た形容詞系外来語の受容意識」国際学術学会東アジア文化学会　2005 年 6 月

梁敏鎬　「東アジアにおける韓国語・日本語・中国語のイメージ」　韓国日本語

学会　2005 年 9 月

林青樺　「現代日本語における実現可能文の位置付け」　日本語学会　2005 年 11 月

新井小枝子　「群馬県方言における養蚕の＜場所＞を表す語彙」　日本語学会　2005 年 11 月

李光赫　「条件文の誘導推論をめぐる日中対照」　日本語学会　2005 年 11 月

田附敏尚　「青森県五所川原市方言における文末形式『ンズ』について」日本方言研究会　2005 年 11 月

櫛引祐希子　「東西における意味変化のパターンに関する一考察－方言『えずい』を通して－」　日本語学会 2006 年 5 月

澤村美幸　「東西対立形成の社会的背景－『シャテー（舎弟）』を例として－」　日本方言研究会、2006 年 5 月

梁敏鍋　「外来語の定着に関する研究」　韓国日本日本文学会夏季国際学術大会、2006 年 6 月

川越めぐみ　「東北方言から見た宮沢賢治の童話のオノマトペ」　日本文芸研究会、2006 年 6 月

中西太郎　「あいさつ表現における言語運用上の待遇関係把握」　社会言語科学会、2006 年 8 月

梁敏鍋　「世界 28 カ国（地域）における日本語観国際センサス」　日本行動計量学会、2006 年 10 月

王秀芳　「中国人留学生の言語使用における個人的要因」　社会言語科学会、2007 年 3 月

櫻井真美　「山形市方言『ッタラ』の用法と世代差」　日本方言研究会、2007 年 5 月

川越めぐみ　「山形県寒河江市方言におけるＡＢラＡＢラ型オノマトペについての考察」　日本語学会、2007 年 5 月

佐藤志帆子　「『桑名日記』にみる近世末期下級武士の待遇表現」　日本語学会、2007 年 5 月

三浦祐子　「原因・理由を表す複合助辞と時制との関わり」　日本文芸研究会、2007 年 6 月

梁敏鍋　「外来語の使用実態及び意識に関する社会言語学的な研究」　韓国日本語文学会、2007 年 10 月

梁敏鍋　「韓国における外来語の使用実態と受容要因」　日本言語学会、2007 年

11 月

李仙花　「反使役化自動詞文と受身文との関わりについて」　日本語学会、2007 年 11 月

張雅智　「否定疑問文の機能と『傾き』」　日本語学会、2007 年 11 月

澤村美幸　「＜葬式＞を表す方言分布の形成と社会的背景」　日本語学会、2007 年 11 月

安本真弓　「中古における感情形容詞と感情動詞の対応とその要因」　日本語学会、2007 年 11 月

内間早俊　「奄美佐仁方言のｍ＞ｗについてー先島方言のｗ＞ｂとの比較を通してー」　日本方言研究会、2007 年 11 月

三浦佑子　「プラスの意味を表す複合接続助詞ー「おかげで」「だけあって」におけるプラス性の違いー」　日本語学会、2008 年 5 月

王其莉　「日本語の「だろう」と中国語の「吧」」　日本文芸研究会、2008 年 6 月

金殷模　「「てもらう」文の基本的意味から周辺的意味へ」　日本語学会、2008 年 11 月

田附敏尚　「青森県五所川原市方言における推量形式「ビョン」についてー「べ」との対比をもとにー」　日本語学会、2008 年 11 月

王秀芳　「挨拶場面における在日中国人の言語使用ーニューカマーとオールドカマーの比較ー」　日本語学会、2008 年 11 月

楊淑雲　「擬態語の程度表現についてー形容詞を修飾する場合ー」　日本語学会、2008 年 11 月

３　大学院生・学部生等の受賞状況

なし

４　日本学術振興会研究員採択状況

2008 年度　ＤＣ2　採用　1 名

５　留学・留学生受け入れ

５－１　大学院生・学部学生等の留学数

2003 年度　大学院　計 1 名　オーストラリア国立大学（オーストラリア）

５－２　留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
04	0	18	18
05	2	13	15
06	6	13	19
07	9	17	26
08	13	14	27
計	30	75	105

６　社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
04	0	2	2
05	0	3	3
06	0	2	2
07	0	2	2
08	0	1	1
計	0	10	10

７　専攻分野出身の研究者・高度職業人

７－１　専攻分野出身の研究者

琴鍾愛　韓国忠南国立大学校　非常勤講師　2004 年度

倉田静佳　共立女子大学非常勤講師　2004 年度

百留康晴　台湾文藻外国語学院日本語学科助理教授　2004 年度

玉懸元　中京大学文学部講師　2007 年度

林青樺　台湾淡江大学外国語学部助理教授　2007 年度

小西いずみ　広島大学大学院教育学研究科講師　2008 年度

新井小枝子　群馬県立女子大学非常勤講師　2008 年度

７－２　専攻分野出身の高度職業人

高校教員 6 名、

ジャーナリスト 3 名、
出版社社員 1 名

８　客員研究員の受け入れ状況

2003 年度：2 名（韓国・台湾）
2004 年度：0 名
2005 年度：2 名（中国・韓国）
2006 年度：2 名（中国）
2007 年度：2 名（中国・台湾）
2008 年度：1 名（台湾）

９　外国人研究者の受け入れ状況

2003 年度：2 名（韓国・台湾）
2004 年度：0 名
2005 年度：2 名（韓国・台湾）
2006 年度：2 名（中国）
2007 年度：2 名（中国・台湾）
2008 年度：1 名（台湾）

１０　刊行物

『国語学研究』（44 集～48 集：年刊）
『東北大学大学院文学研究科言語科学論集』（第 8～12 号：年刊）［言語学専攻分野・日本語教育学専攻分野と共同で刊行］

１１　学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

2004 年度　公開講演・シンポジウム「方言の記録と保存－未来へ贈ることばの宝庫－」開催
2005 年度　日本方言研究会・訓点語学会・近代語研究会の各秋季大会の開催、日本語学会秋季大会の開催
2007 年度　日本方言研究会事務局
2008 年度　東北文化講演会「いま、方言が面白い！」開催
シンポジウム「山田文法の現代的意義」開催

１２　専攻分野主催の研究会等活動状況

国語学研究会の開催

2004 年度：5 回（第 324 回～328 回）

2005 年度：6 回（第 329 回～334 回）

2006 年度：5 回（第 335 回～339 回）

2007 年度：6 回（第 340 回～345 回）

2008 年度：6 回（第 346 回～351 回）

１３　組織としての研究・教育活動に関する過去 5 年間の自己点検と評価

国語学専攻分野は、この 5 年間、国語学の領域全般に亘って研究・教育活動を展開してきました。具体的には、当専攻分野の伝統に従って、大きく、国語史学・方言学・現代語研究の 3 分野態勢を取り、国語史学は大木一夫准教授（2003 年度赴任）、方言学は小林隆教授、現代語研究は斎藤倫明教授と甲田直美准教授（2006 年度赴任）が中心になって担当し、研究および学生指導に精力的に当たってきました。その結果、多数の大学院生を社会に送り出すとともに、多くの優秀な人材を学界へデビューさせることができました。また、学問の性質上、方言学の分野では、社会からの連係の要請が、また、現代語研究の分野では、留学生を通して東アジア諸国との関係強化の要請が強く、そのいずれに対しても、できるだけ積極的に対応するように務めてきました。その結果、当専攻分野はそれらの方面でも高く評価されています。

具体的な当専攻分野における研究活動として第一に挙げられるのは、方言学に関する活動です。2004 年度には、「東北大学方言研究センター」を立ち上げ、調査資料のデータベース化、学生の教育、マスコミの方言企画への協力等の社会的な要請に積極的に対応するとともに、公開講演・シンポジウム「方言の記録と保存－未来へ贈ることばの宝庫－」を主催し、100 名近くの市民の参加を得ました。また、2008 年度には、東北文化講演会に協力し、「いま、方言が面白い！」を開催しました。方言関係では日本で唯一の全国学会である「日本方言研究会」の事務局も担当しています。第二に、国際交流に関して、客員研究員、中国政府派遣研究員という形で、計 9 名（延べ数）の外国人研究者を受け入れ、教員や学生との研究上の交流を図ってきました。なお、2005 年度以降、斎藤倫明教授が韓国、台湾へ出張し、日本語学に関する学会で講演を行なったり集中講義を行なったりしました。第三に、当専攻分野では、毎年 1 冊『国語学研究』という研究誌を刊行していますが、この 5 年間（5 冊）で計 60 本以上の研究論文を掲載しました。執筆者は大学院生と卒業生が中心ですが、教員や当専攻分野に縁のある全国の研究者が質の高い論文を執筆し、学界から高い評価を得ています。その他年に 5、6 回

「国語学研究会」という公開の研究発表会を開催しています。

当専攻分野における教育活動として挙げられるのは、第一に、大学院生の受け入れ数の多さです。特に、当専攻分野では外国人留学生を数多く受け入れ、この 5 年間で、文学研究科で最も多い計 105 名（延べ数）の留学生を受け入れています。中心は、韓国、台湾、中国の東アジアからの留学生ですが、アメリカ、オーストラリアからも来ています。また最近は、タイやモンゴル、ポーランド、リトアニアといった従来あまり交流のなかった国からの留学生も受け入れています。第二に、学位授与ですが、当専攻分野は、この 5 年間で、課程博士を 12 名出しており、毎年コンスタントに 2 名以上課程博士の学位を授与しています。第三に、大学院生の研究活動に対する支援ですが、雑誌論文の執筆に関して、上記『国語学研究』を始め、言語科学専攻で共同発行している『言語科学論集』、文学研究科の発表誌『文化』を中心に発表するように指導しています。その他できるだけ全国学会誌にも投稿することを勧めており、この 5 年間で、日本語学会（国語学会）の機関誌『日本語の研究』（『国語学』）に 7 本、日本語文法学会の機関誌『日本語文法』に 2 本、社会言語科学会の機関誌『社会言語科学』に 1 本、訓点語学会の機関誌『訓点語と訓点資料』に 1 本、計量国語学会の機関誌『計量国語学』に 1 本、日本文芸研究会の機関誌『文芸研究』に 6 本というように、数多くの論文を大学院生が発表し、それぞれ学界から高い評価を得ています。なお、論文発表の前段階として、全国学会での口頭発表にも力を入れています。

最後に、特筆すべき点として、2008 年度に研究科長裁量経費を得て、研究室の初代教授である山田孝雄博士の没後 50 年を記念し、「山田文法の現代的意義」を開催することで斯学の発展に大いに貢献したことを付け加えておきます。

以上、国語学専攻分野における過去 5 年間の研究・教育活動について述べました。

Ⅲ　教員の研究活動（2004～2008 年度）

１　教員による論文発表等

１－１　論文

斎藤倫明「単語中心主義と語形成論」,『国語学研究』43,東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会,pp.左 63-74,2004

斎藤倫明「語形成と選択制限－文法と語彙の間－」,『日本語文法』5-1,日本語文法学会,pp.121-137,2005

斎藤倫明「松下文法の活用論－文法論に原辞論は不要か－」,『日本語学の蓄積と展望』,明治書院,pp.235-254,2005

斎藤倫明「語構成と品詞－『以上』を対象として－」『東北大学文学研究科研究』

58、東北大学文学研究科、2009（予定）
小林隆「アクセサリーとしての現代方言」,『社会言語科学』7-1,社会言語科学会,pp.105-107,2004
小林隆「『しまった！』に地域差はあるか？」,『月刊言語』34-11,大修館書店,pp.30-32,2005（澤村美幸と共著）
小林隆　「日本語方言の変質」,宮岡伯人『今、世界のことばが危ない！』,クバプロ,pp.77-82,2006
小林隆「『けり』から『け』へ－古典語助動詞『けり』の地理的展開素描－」,大西拓一郎編『方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究』科研費報告書,pp.53-58,2006
小林隆「文法的発想の地域差と日本語史」，『日本語学』26-11,明治書院,pp.76-83,2007
小林隆「方言形成における中央語の再生」，『シリーズ方言学 1 方言の形成』，岩波書店, pp.1-42,2008
大木一夫　「もう一つの文法論―文法理論における文法教科書の位置づけ―」,『埼玉大学国語教育論叢』第 7 号,pp.1-14,2004
大木一夫「日本語文法論史研究の方法についての覚書」,『東北大学文学研究科研究年報』第 53 号,pp.35-62,2004
大木一夫「動詞の連体形」,『国語学研究』43,pp.85-97,2004
大木一夫「喚体的な文と文の述べ方」,『文化』69-3･4,pp.38-57,2006
大木一夫　「認識する文」,『東北大学文学研究科研究年報』第 57 号, pp.1-27, 2008
甲田直美・天野碧「文章記憶の自由再生における分散効果の研究」『滋賀大学教育学部紀要Ⅱ：人文科学・社会科学』54, pp 25-32. 2005
甲田直美・廣田卓也「説明的文章の要約作成と文章理解」『パイディア』14、pp.127-134. 2006
甲田直美（Naomi Koda）　Balancing Contextual Effect with Processing Effort: Assessment of Relevance Theory. *Culture* 70-1/2, pp. 387-400. 2007
甲田直美（Naomi Koda）　Connective Interference and Facilitation: Do Connectives Really Facilitate the Understanding of Discourse? *The Annual Reports of Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University*, 56.pp.29-42. 2007
甲田直美「テクスト理解の既定因－読み手の受容スタイルと論証パターンから」『ことばと認知のメカニズム』ひつじ書房（印刷中）
甲田直美「日本語のレトリックとテクスト」『人環フォーラム』23 号（印刷中）

飯田寿子「個数合成語における列挙性と並立性－＜２＞をあらわす構成要素からなる合成語を中心に－」,『文化』67-3･4, pp.21-39,2004

１－２　著書・編著

斎藤倫明『語彙論的語構成論』（単著）,ひつじ書房, 286p,2004

小林隆『方言学的日本語史の方法』（単著）,ひつじ書房, 737p, 2004

小林隆『日本のことばシリーズ 15 新潟県のことば』（共編著）,明治書院, 255p, 2005

小林隆『方言が明かす日本語の歴史』（単著）,岩波書店, 212p, 2006

小林隆『方言文法全国地図 6』（共編著）,財務省印刷局, 650p（地図 60 葉）,2006

小林隆『シリーズ方言学 2 方言の文法』（編著）,岩波書店, 223p, 2006

小林隆『シリーズ方言学 3 方言の機能』（編著）,岩波書店, 171p, 2007

小林隆『シリーズ方言学 4 方言学の技法』（編著）,岩波書店, 221p, 2007

小林隆『ガイドブック方言調査』（共編著）,ひつじ書房, 212 p, 2007

小林隆『日本語方言形成モデルの研究』（編著）,平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書, 123p, 2007

小林隆『シリーズ方言学 1 方言の形成』（編著）,岩波書店, 222p, 2008

大木一夫『叙法と文の機能』,平成 17 年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書, 74p, 2006

１－３　翻訳、書評、解説、辞典項目等

（１）辞典項目

斎藤倫明「語と形態素」「語構成」,日本語教育学会編『新版日本語教育事典』,大修館書店,2005

斎藤倫明「日本語の語彙」、鈴木良次他編『言語科学の百科事典』、丸善、pp.315-336、2006 年

斎藤倫明「形態」「形態素」「語構成」「語根」「接辞」「接頭辞」「接尾辞」「派生語」、『日本語学研究事典』、明治書院、2007 年

（２）解説

大木一夫「係り結びの機能」,中村捷編『人文科学ハンドブック スキルと作法』,東北大学出版会,pp.116-119,2005

大木一夫　「日本語史１」（平成 17 年 18 年国語国文学会の動向）,『文学・語学』第 190 号, 63-67, 2008

大木一夫　「古くて新しい古典文法」,阿子島香編『ことばの世界とその魅力』（人

文社会科学講演シリーズ III），東北大学出版会, pp.53-88, 2008

（３）書評

斎藤倫明「〔書評〕小林英樹著『現代日本語の漢語動名詞の研究』」、『日本語文法』6-2、2006 年

斎藤倫明「〔書評〕由本陽子『複合動詞・派生動詞の意味と統語－モジュール形態論から見た日英語の動詞形成－』」『日本語の研究』3-2、2007 年

（４）その他

なし

１－ ４　口頭発表

（１）国際学会

斎藤倫明　講演「日本語語彙の諸相」,韓国日本文化学会,韓国国立忠南大学校,2005 年 10 月 29 日

斎藤倫明　講演「現代日本語の語彙論と他分野との関わり」台湾南台科技大学、2008 年 5 月 2 日

斎藤倫明　講演「現代日本語の語彙論とその課題」台湾文藻外語学院、2008 年 5 月 3 日

斎藤倫明　「言語単位から見た山田文法の組織をめぐって」（「シンポジウム　山田文法の現代的意義」）、2008 年 11 月 29 日

斎藤倫明　講演「複合語の構成要素間に見られる受身的関係について」台湾淡江大学、2008 年 12 月 5 日

甲田直美 The Interrelationship of Reading Comprehension Processes and Summary Protocols for JFL Learners./ 日本人学習者における読解過程と要約文の相関 PJPW：Princeton Japanese Pedagogy Workshop　Princeton University, USA. 2003.5.

甲田直美　Computer-Assisted Language Learning: Its Scope and Limits. The International Forum on "Educational Cooperation and Teaching and Learning Foreign Languages" 80th Anniversary of Chiang Mai Rajabhat University, Thailand 2005.2

甲田直美（Naomi Koda）　Cultural Thought Patterns: A Case Study of Arabic and Japanese. Presented at International Symposium on Comparative Literature and

Linguistics, ESCL: Egyptian Society of Comparative Literature, Egypt 2007.4

飯田寿子「並立構造からみた現代日本語における 4 字漢字語の語構造－包含的な結合からみた並立構造について－」韓国日本語文学会、2006 年 10 月

（２）国内学会

小林隆「今、世界のことばが危ない！」, 第 19 回「大学と科学」公開シンポジウム, 東京国際交流館,2004 年 11 月 11 日

小林隆「知られざる地域差を探る」,日本方言研究会シンポジウム,甲南大学, 2005 年 5 月 27 日

小林隆「リンクする方言研究」,日本語学会シンポジウム,甲南大学, 2005 年, 5 月 28 日

小林隆「東北方言格助詞『サ』の成立を現代九州方言に追う」,日本文法学会研究発表,明海大学, 2005 年 12 月 16 日

小林隆「方言の 20 世紀」,日本語学会シンポジウム,関西大学, 2007 年 5 月 26 日

甲田直美・廣田卓也「要約文の生成過程に関する一考察」,第 45 回日本教育心理学会,大阪国際会議場（発表論文集,p.817）, 2003. 8

甲田直美「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果」『日本心理学会第 70 回大会発表論文集』p.961. 第 70 回日本心理学会、九州大学、2006 年 11 月

甲田直美・スライマーン　アラー　エルディーン 「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果 －アラビア語母語話者の場合－」『日本心理学会第 71 回大会発表論文集』p.181. 第 71 回日本心理学会、東洋大学　2007 年 9 月

甲田直美・王其莉・楊雅銀「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果－中国語母語話者の場合－」第 49 回日本教育心理学会、文教大学　2007 年 9 月

（３）その他

斎藤倫明　講演「語構成要素間の関係について」,釜慶大学国際講演会,韓国国立釜慶大学校, 2003 年 10 月 14 日

斎藤倫明　講演：日本語語彙の分類について－語彙・語彙論とは何か－（台湾致遠管理学院国際講演会）、台湾致遠管理学院、2007 年 4 月 27 日

大木一夫　講演「日本語のモダリティと文の機能」,致遠管理学院国際講演会,台湾致遠管理学院, 2006 年 12 月 8 日

大木一夫　講演「日本語のモダリティと文の構造」,中華大学国際講演会,台湾中華大学, 2006 年 12 月 11 日

２　教員の受賞歴（2004～2008 年度）

小林隆　第 23 回新村出賞（2004 年度）

Ⅳ　教員による競争的資金獲得（2004～2008 年度）

（１）科学研究費補助金

2006～2008 年度　課題番号 : 18520348　基盤研究(C)小林好日を通して見た近代日本語学確立期の学史的研究　　研究代表者：斎藤倫明　2,700,000 円

2004～2005 年度　課題番号 : 14310196　基盤研究(B)方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究　研究分担者：小林隆

2004～2006 年度　課題番号 : 15320055　基盤研究(B)日本語方言形成モデルの構築に関する研究　研究代表者：小林隆　16,100,000 円

2005～2008 年度　課題番号 : 17320072　基盤研究(B)日本語の対人配慮表現の多様性　研究分担者：小林隆

2006～2008 年度　課題番号 : 18520348　基盤研究(C)小林好日を通して見た近代日本語学確立期の学史的研究　研究分担者：小林隆

2007～2008 年度　課題番号 : 19520384　基盤研究(C)方言形成における中央語再生現象の研究　研究代表者：小林隆　1,860,000 円

2007～2008 年度　課題番号 : 19320067　基盤研究(B)現代日本語の感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究　研究分担者：小林隆

2004～2005 年度　課題番号：16720099　若手研究(B)中古語における叙法体系の研究　研究代表者：大木一夫　1,100,000 円

2007～2008 年度　課題番号 : 19520383　基盤研究(C)古代日本語における連体形の機能とその変遷　研究代表者：大木一夫　780,000 円

2006～2008 年度　課題番号 : 18520348　基盤研究(C)小林好日を通して見た近代日本語学確立期の学史的研究　研究分担者：大木一夫

2003～2005 年度　課題番号 : 15720123　若手研究 (B)日本語学習者における「自然な文連鎖」の認識と文章理解，文章作成能力との相関の解明　研究代表者：甲田直美　1,800,000 円

2006～2008 年度　課題番号 : 18720139　若手研究（B）「テクストにおける「論証の仕方」と日本語学習者の文章理解・作成の相関の解明」研究代表者：

甲田直美　1,500,000 円

（２）その他

１）総長裁量経費

2004 年度　東日本における方言研究・教育センターの構築　研究代表者：小林隆　7,000,000 円

2004 年度　東日本における方言研究・教育センターの構築　研究分担者：斎藤倫明

2004 年度　東日本における方言研究・教育センターの構築　研究分担者：大木一夫

２）研究科長裁量経費

2008 年度　斎藤倫明・小林隆・大木一夫・甲田直美「公開シンポジウム　山田文法の現代的意義」開催（研究科長裁量経費）

Ⅴ　教員による社会貢献（2004～2008 年度）

斎藤倫明　財団法人仙台国際交流協会主催日本語教師ボランティア育成講座講師　2003～2008 年度

斎藤倫明　出前授業：岩手県水沢高等学校,「日本語の文法と文法論」,2004 年 9 月 18 日

斎藤倫明　講演：東北ゆかりの国語学者たち（宮城県民大学）、2006 年 9 月 9 日

小林隆　講演：東北方言の誕生（有備館講座）,岩出山市有備館,2005 年 10 月 20 日

小林隆　監修・出演：ことばマガジン（東日本放送）　2005～2008 年度

小林隆　講演：方言－言語の多様性を探る－（東海高校・中学サタデープログラム）2008 年 2 月

小林隆　出演：知ったか仙台弁（東北放送）　2008 年度

小林隆　講演：方言は語る（宮城県高等学校国語教育研究会）2008 年 5 月

小林隆　講演：方言の隠れた魅力（東北文化室講演会）2008 年 10 月

小林隆　講演：民話と方言（山形短期大学公開講座）2008 年 11 月

大木一夫　監修：ウォッチンみやぎ「ハロージャパニーズ」（東北放送）2006 年度

大木一夫　講演：古くて新しい古典文法（有備館講座）,大崎市岩出山地域福祉

センター,2006 年 12 月 16 日

甲田直美　滋賀県看護教員養成講座（論理学）講師　2005 年度

Ⅵ　教員による学会役員等の引き受け状況（2004～2008 年度）

斎藤倫明

日本語学会評議員（2004～2008 年度）

日本語文法学会評議員（2004 年度）

日本語文法学会学会誌委員（2004～2008 年度）

日本文芸研究会委員（2004～2008 年度）

日本語文法学会学会誌委員長（2007～2008 年度）

小林隆

日本語学会評議員（2004～2008 年度）

日本語学会大会企画運営委員長（2006～2008 年度）

日本方言研究会世話人（2008 年度）

日本方言研究会事務局（2007 年度）

日本文芸研究会委員（2004～2008 年度）

大木一夫

訓点語学会委員（2005～2008 年度）

日本文芸研究会委員（2004～2008 年度）

飯田寿子

日本方言研究会事務局（2007 年度）

日本文芸研究会委員（2007～2008 年度）

Ⅶ　教員の教育活動（2008 年度）

（１）学内授業担当

１　大学院授業担当

斎藤倫明

1 学期　日本語構造論講読　近世の言語論講読

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅰ　国語史・方言研究の諸問題

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅲ　国語史・方言研究の諸問題

2 学期　日本語構造論特論Ⅰ　語構成と文法

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅱ　現代語研究の諸問題

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅳ　現代語研究の諸問題

通年　課題研究

小林隆

1 学期　日本語構造論研究演習　方言調査法

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅰ　国語史・方言研究の諸問題

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅲ　国語史・方言研究の諸問題

2 学期　日本語変異論特論Ⅲ　方言学的日本語史研究

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅱ　現代語研究の諸問題

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅳ　現代日本語研究の諸問題

通年　課題研究

大木一夫

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅰ　国語史・方言研究の諸問題

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅲ　国語史・方言研究の諸問題

1 学期　日本語変異論特論Ⅰ　文論

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅱ　現代語研究の諸問題

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅳ　現代語研究の諸問題

2 学期　日本語変異論講読　古代語形容詞の研究

通年　課題研究

甲田直美

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅰ　国語史・方言研究の諸問題

1 学期　日本語変異論研究演習Ⅲ　国語史・方言研究の諸問題

2 学期　日本語構造論研究演習Ⅱ　文章・談話研究の諸問題

2 学期　日本語構造論特論Ⅱ　文章・談話の構造論

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅱ　現代語研究の諸問題

2 学期　日本語変異論研究演習Ⅳ　現代語研究の諸問題

2　学部授業担当

斎藤倫明

第 3 セメスター　国語学基礎講読　古典講読Ⅰ

第 5 セメスター　現代日本語学講読　近世言語論の講読

第 6 セメスター　現代日本語学概論　現代日本語の語彙と語彙論

第 6 セメスター　現代日本語学各論　語構成と文法

小林隆

第 4 セメスター　国語学概論　方言研究

第５セメスター　現代日本語学演習　方言調査法

第６セメスター　国語学各論　方言学的日本語史研究

大木一夫

第３セメスター　国語学概論　日本語の変遷

第５セメスター　国語学各論　文論

第４セメスター　国語学基礎講読　古典講読Ⅱ

第６セメスター　国語学講読　古代語形容詞の研究

甲田直美

第３セメスター　現代日本語学概論　現代日本語学の諸問題

第６セメスター　現代日本語学各論　文章・談話の構造論

第６セメスター　現代日本語学演習　文章・談話研究の諸問題

３　共通科目・全学科目授業担当

小林隆

第１セメスター　基礎ゼミ　日本語の不思議

大木一夫

第２セメスター　言語学　日本語への視座

甲田直美

第２　セメスター　言語学概論

（２）他大学への出講（2004～2008 年度）

斎藤倫明

宮城学院女子大学非常勤講師　2004～2008 年度

東京外国語大学非常勤講師　2006 年度

台湾何台科技大学非常勤講師　2006・2008 年度

国立台湾大学非常勤講師　2007 年度

小林隆

宮城学院女子大学非常勤講師　2004～2008 年度

群馬県立女子大学非常勤講師　2004～2008 年度

名古屋大学非常勤講師　2005 年度

九州大学非常勤講師　2005 年度

東京大学非常勤講師　2008 年度

大木一夫

盛岡大学文学部非常勤講師　2005～2008 年度

甲田直美

京都外国語大学大学院非常勤講師　2006 年度

飯田寿子

福島大学非常勤講師　2008 年度